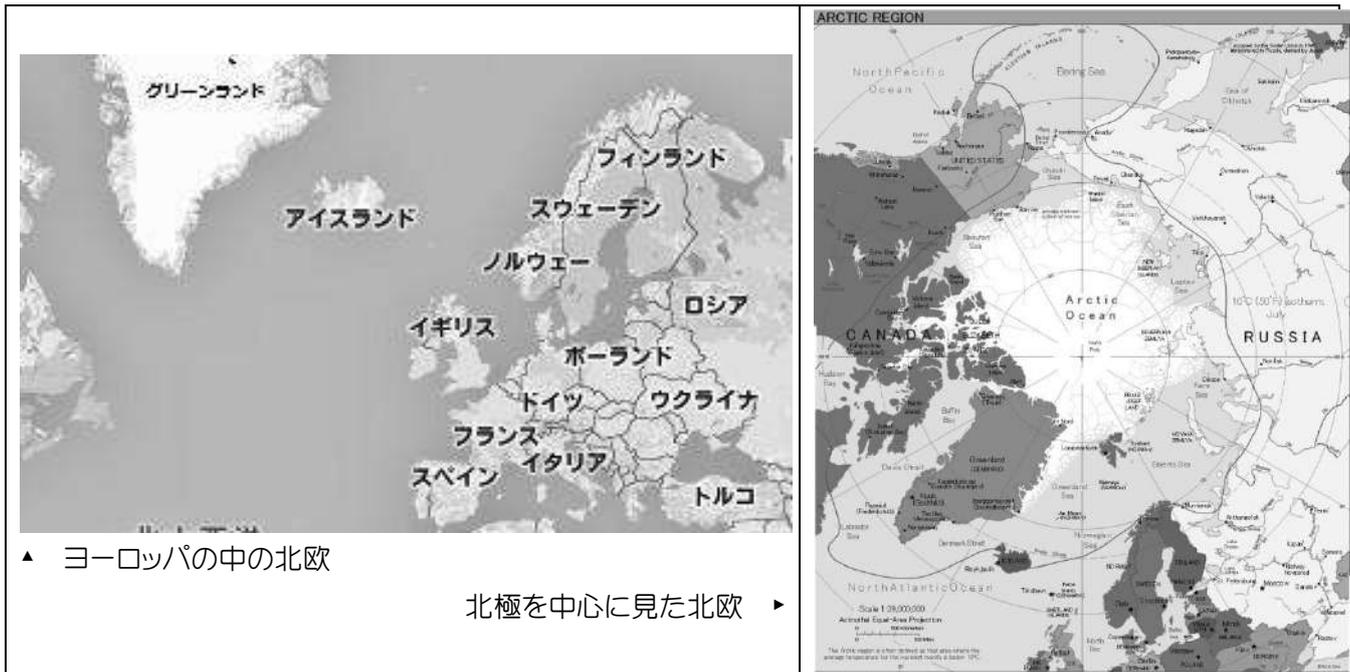


参考資料  
〈北欧地図〉

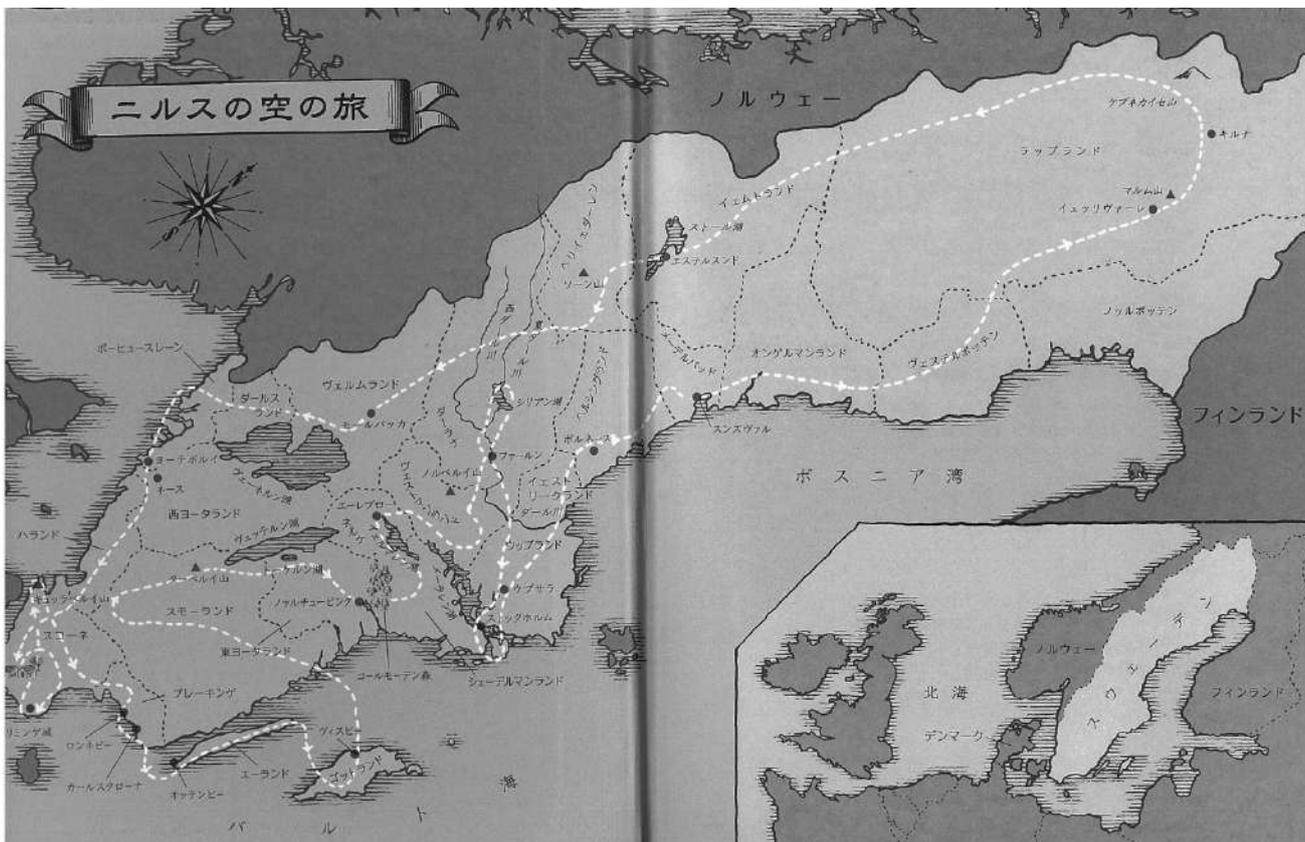


▲ ヨーロッパの中の北欧

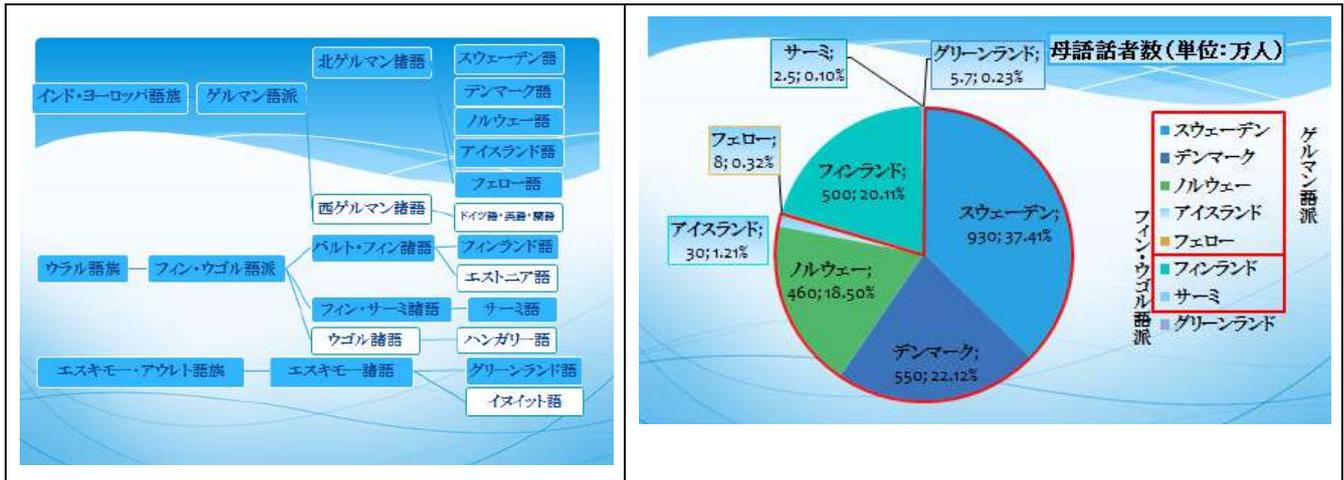
北極を中心に見た北欧 ▶

※2014年現在、「北欧」とは、政治的には、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランド、グリーンランド(デンマーク自治領)、フェロー諸島(デンマーク自治領。アイスランドとイギリスの間にある群島)、オーランド諸島(フィンランド自治領。フィンランドとスウェーデンの間にある群島)を指す。文化的には、前述の国・地域とラップランド(サーメ居住地域。ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・ロシアの4か国にまたがる北部地域)を指すことが多い。

〈『ニルスのふしぎな旅』地図〉菱木晃子訳『ニルスのふしぎな旅』(福音館書店)裏表紙見返し



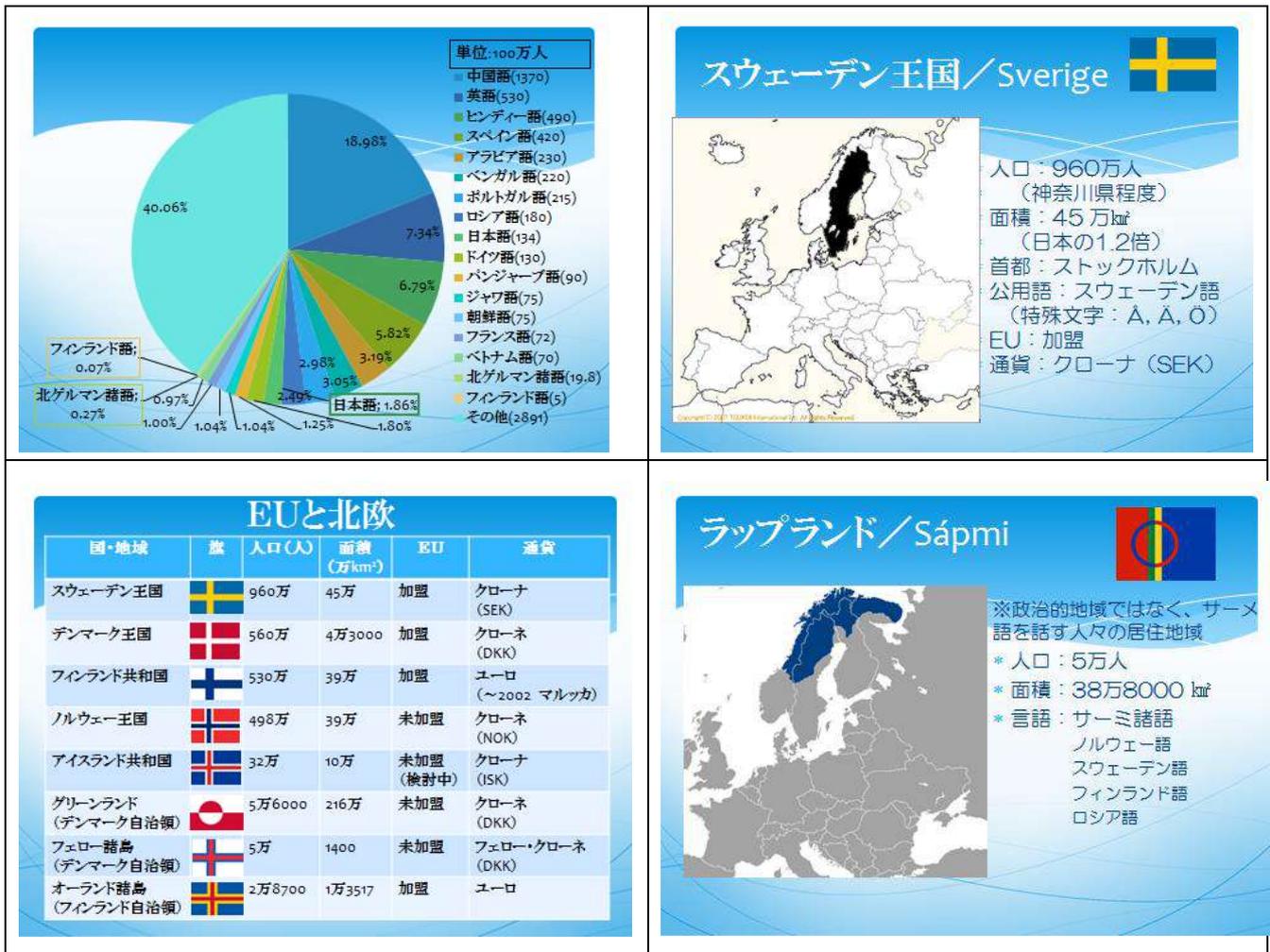
### 〈北欧の言語〉



※白抜き部分は北欧語以外の言語

### 〈北欧・EU・世界におけるスウェーデンの位置づけ〉

北欧諸国の中央に位置し、人口も最も多い強国。デンマーク、ロシアと雌雄を争う。  
世界の中では、北欧語人口は北ゲルマン諸語・フィンランド語あわせて 0.3%程度。



〈セルマ・ラーゲルレーヴ関連年表〉

年	ラーゲルレーヴ年表	北欧・世界の出来事
1858	スウェーデンのヴェルムランド地方に生まれる。	1842:初等教育義務化
1882	ストックホルムの教員養成所を受験。1885 年から女学校で教鞭をとる。	1850s~:北欧の近代化 1880:国民学校教員教会創設
1885	父グスタフ・ラーゲルレーヴ死去。次兄ヨハンが家と農場を継ぐが、運営に失敗。	
1889	競売により、モールバックが人手に渡る。	「80年代文学」の隆盛。多くの女性作家がデビュー
1891	『イエスタ・ベルリングのサガ』(Gösta Berlings saga) 出版。「90年代文学」の代表作。	「90年代文学」の隆盛。目に見えないもの(過去、魂、感情)、郷土、ナショナリズムが特色。 1901:読本作成委員会設置
1899	『地主屋敷の物語』(En Herrgårdssägen)	
1901	『エルサレム 第1部』(Jerusalem I)。第1回ノーベル文学賞の候補となる。	
1902	『エルサレム 第2部』(Jerusalem II)。英語訳、ドイツ語訳などと同時出版。	1905:ノルウェー独立(同君連合解消)
1906/07	『ニルスのはしぎな旅』出版。80か国語以上に翻訳。	1905:小山内薫訳『彼得の母』(初邦訳)
1907	ウップサラ大学名誉博士号授与(女性初)	
1909	ノーベル文学賞受賞(女性初・スウェーデン人初)	1908:森鷗外訳『牧師』 1909:男子普通選挙開始
1911	ストックホルムで開催された国際女性参政権会議で演説「家庭と国家」。女性参政権の導入を主張。	「90年代」文学の終焉と「モダニズム」文学の勃興
1912	『御者』(Körkarlen)	
1914	スウェーデン・アカデミー会員に選出(女性初) 『ポルトガリエンの皇帝』(Kejsarn av Portugallien)	第一次世界大戦(~1918)
1918	反戦小説『追放者』(Bannlyst) → 低い評価	1917:フィンランド独立
1921	恋人ソフィー・エルカン死去	1919:女性参政権獲得
1922	『モールバック』(Mårbacka)。自伝的作品で高い評価	第一次世界大戦の影響による不況・失業問題
1925/28	『レーヴェンシールドの指輪』(Löwensköldska ringen) 三部作	1929: 世界恐慌 ファシズムの台頭
1930	『モールバック第二部 一人の子どもの思い出』(Ett barns memoarer. Mårbacka II)	
1932	『モールバック第三部 セルマ・オットィーリア・ロヴィーサーラーゲルレーヴの日記』(Dagbok för Selma Ottilia Lovisa Lagerlöf. Mårbacka III)	
1933	『土間で書いた話』(Skriften på jordgolvet) → ナチズム批判	
1940	ヴェルムランドで死去	

※「北欧・世界の出来事」で国名・地域名がない場合はスウェーデン



▲モールバックの生家

▲『ニルスのはしぎな旅』初版表紙

## 〈セルマ・ラーゲルレーヴ著作リスト〉

出版年	スウェーデン語タイトル	原題の意味	日本語訳
1891	<i>Gösta Berlings saga*</i>	イエスタ・ベルリングのサガ ※サガ=物語	・丸山武夫訳『ゲスタ・ベルリングの傳説』白水社、1940・独語 ・野上彌生子訳『ゲスタ・ベルリング』野上彌生子全集 第11期 第十八巻 翻訳1』所収、岩波書店、1987(初出:家庭読み物刊行会、1921)・抄訳・英語 ・森鷗外訳『牧師』『鷗外全集第4巻』所収、岩波書店、1972(初出:雑誌『心の花』、1908)
1894	<i>Osynliga länker*</i>	見えざる絆(短編集)	・宮原晃一郎訳『ハルスタネスよりの話』『北欧近代短篇集』所収、白水社、1939 ・山室静訳『つるばらの茂みで』徳永康元編『ヨーロッパ短篇名作集』所収、學生社、1961 ・山室静訳『小鳥の巢の伝説』尾崎義編『世界短篇文学全集 10 北歐・東欧文学』、集英社、1963
1897	<i>Antikrists mirakler*</i>	アンチ・キリストの奇跡	柴田治三郎訳『巴旦杏の花咲く頃』(上下)みすず書房、1950・独語
1899	<i>En herrgårdsägen*</i>	地主屋敷の物語	・生田春月訳『地主の家の物語』『世界文学全集第27巻 北欧三人集』所収、新潮社、1928・独語? ・佐々木基一訳『地主の家の物語』小山書店、1951・独語? ・松岡尚子訳『ダーラナの地主館奇談』日本図書刊行会、2001・独語
1899	<i>Drottningar i Kungahälla*</i>	クングヘラの女王たち	
1901	<i>Jerusalem I. I Dalarne*</i>	エルサレム第一部 ダーラナにて	・石賀修訳『エルサレム 第1部』岩波書店、1942・原語 ・吉田比砂子訳『イングマルソン家の人びとくエルサレム 1』(ふれ愛ブックス)、けやき書房、1996・英語
1902	<i>Jerusalem II. I det heliga landet*</i>	エルサレム第二部 聖地にて	イシガオサム訳『エルサレム 第2部』岩波書店、1952・原語
1903	<i>Herr Arnes penningar*</i>	アルネ氏の宝	万沢まき『アーネ師の宝』『沼の家の娘』所収、三笠書房、1952・原語
1904	<i>Kristuslegender*</i>	キリスト伝説集	・イシガオサム訳『キリスト伝説集』岩波書店、1955・原語 ・さとらひでかず・しなこ訳『へいしのなみだ』(絵本)、こぐま社、1967 ・中村妙子訳『むねあかどり』(絵本)日本基督教団出版局、1989・英語 ・司修文・絵『ラーゲルレーヴのおばあちゃん』(絵本)、ぶねうま舎、2014
1906 1907	<i>Nils Högelssons underbara resa genom Sverige</i>	ニルス・ホルガシヨンの奇跡的なスウェーデン一周旅行	・香川鉄蔵『飛行一寸法師』大日本図書、1918 ・今西佑行訳『ニルスのふしぎな旅』坪田譲治・村岡花子監修『たのしい幼年童話9 ふしぎな童話集』所収、三十書房、1962 ・香川鉄蔵・香川節訳『ニルスのふしぎな旅』(全4巻)偕成社、1982・原語 ・菱木晃子訳『ニルスの不思議な旅』福音館書店、2007・原語
1908	<i>En saga om en saga och andra sagor*</i>	あるサガのサガとその他のサガたち(短編集) ※日本語訳は、短編集所収の短編を独立して訳したもの。	・生田春月訳『沼の家の娘』『世界文学全集第27巻 北欧三人集』所収、新潮社、1928・独語? ・万沢まき『沼の家の娘』『沼の家の娘』所収、三笠書房、1952・原語 ・中村妙子訳『クリスマス・ローズの伝説』『クリスマス物語集—世界の家庭で読みつがれている—』所収、偕成社、1979・英語 ・山室静訳『軽気球』『ちくま文学の森 11 機械のある世界』所収、1988
1911	<i>Liljecronas hem*</i>	リリエクローナの家	石丸静雄訳『乙女のふるさと』三笠書房、1956・独語
1912	<i>Körkarlen*<sup>e</sup></i>	御者	・石丸静雄訳『幻の馬車』角川書店、1959・独語 ・山室静訳『幻の馬車』遠藤周作編『キリスト教文学の世界 13』所収、主婦の友社、1977
1914	<i>Kejsarn av Portugalien*</i>	ポルトガリエンの皇帝	イシガオサム訳『ポルトガリアの皇帝さん』岩波書店、1981・原語
1915	<i>Troll och människor*</i>	トロールと人間(エッセイ・短編・詩・講演集)	・佐々木基一訳『受賞演説』『ノーベル賞文学全集』第18巻所収、主婦の友社、1971 ※「1909年12月10日のノーベル賞演説」の翻訳
1918	<i>Bannlyst*<sup>e</sup></i>	追放者	
1915	<i>Troll och människor 2*</i>	トロールと人間 2(エッセイ・短編・詩・講演集)	
1922	<i>Mårbacka</i>	モールバック	新妻ゆり訳『モールバック—ニルスの故郷』柏書舎、2005・原語
1925	<i>Löwensköldska ringen*</i>	レーヴェンシェルドの指輪	
1925	<i>Charlotte Löwensköld*</i>	シャルロット・レーヴェンシェルド	
1928	<i>Anna Svärð*</i>	アンナ・スヴァード	
1930	<i>Ett barns memoarer: Mårbacka 2</i>	ある子どもの思い出 モールバック2	
1932	<i>Dagbok för Selma Ottilla Lovisa Lagerlöf: Mårbacka 3</i>	セルマ・オットーリア・ロヴィーサ・ラーゲルレーヴの日記 モールバック3	
1933	<i>Höst</i>	秋(エッセイ集)	西田正一訳『開かれた扉』『世界女流作家全集7 北欧編』所収、モダン日本社、1941
書簡	<i>Du kär mig att bli fri. Selma Lagerlöf skriver till Sophie Elkan. Tojer-Nilsen, Ying(urval och kommentarer), Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1996.</i>		あなたはわたしを自由にする セルマ・ラーゲルレーヴからソフィー・エルカンへの手紙(未邦訳)
書簡	<i>En riktig författarhustru. Selma Lagerlöf skriver till Valborg Olander. Tojer-Nilsen, Ying(urval och kommentarer), Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 2006</i>		本物の作家の妻 セルマ・ラーゲルレーヴからヴァルボルグ・オーランダーへの手紙(未邦訳)